

巻頭言

運転と地域移動の包括的な支援に貢献する

大場秀樹

Contribute to comprehensive support for driving and community mobility

Hideki Oba

東京都リハビリテーション病院 リハビリテーションセンター

[〒131-0034 東京都墨田区堤通 2-14-1]

Rehabilitation Center, Tokyo Metropolitan Rehabilitation Hospital

2024年に診療報酬改定で、回復期リハビリテーション病棟入院料1及び2の施設は、地域貢献活動に参加することが望ましいことが新設された。この地域貢献事業とは、地域ケア会議への参加、訪問・通所介護事業所の介護職などへの助言、住民主体の通いの場への支援、地域リハビリテーション支援事業など一般介護予防事業への協力などがあり、医療機関の関与・協力が期待されている。この地域貢献事業に、リハビリテーション（以下、リハ）専門職（理学療法士・作業療法士・言語聴覚士）が参加することで、地域と繋がり、貢献できるリハ専門職が増えていくことを期待したい。もちろん全ての病院で行うことは困難であるが、回復期リハ病棟入院料1を算定するような、高度専門のリハビリテーションを担う病院は望ましい体制づくりを推進する役目があると考えられる。当院では2016年から墨田区の地域リハビリテーション活動支援事業に作業療法士と理学療法士の数名が参加している。そして、この事業に関わる区内のリハ専門職と共に切磋琢磨して、地域づくりによる介護予防を推進している。

回復期を退院した後の「生活とは、家族とは、家とは、地域とは」を見て触れる機会を回復期病棟のリハ専門職が持つ機会は限られている。退院後の患者は、医療と介護の枠組みの中だけの暮らしになっていないだろうか。だが、地域の生活、あるいは生活し続ける地域のあり様や地域性などの課題に対して、リハ専門職の視点

や知識・技術に基づく支援力は地域づくりに活かせると実感している。

当院において、運転再開支援の約7割が外来リハで、評価やドライビングシミュレータなどを活用し指導・訓練を行っている。診療報酬の影響により外来リハが縮小されている昨今、運転支援は、生活期における医療保険でのリハビリテーションで大きな役割があり、生活や仕事を支える社会参加に向けた支援である。特に、運転再開が困難である場合、地域の社会資源を知らないと支援はできない。世界作業療法士連盟（WFOT）は、作業療法士が運転と地域移動の両分野に取り組むことを支持しており、運転が困難な場合は移動手段に関係なく地域社会に参加する選択肢を提示すると表明している¹⁾。つまり運転支援は運転中断後まで関わり、運転と地域移動の支援は別々ではなく包括的に捉えることが重要である。今後、運転支援を行う病院の中から、地域移動への取り組みに関わる施設が増えていくことを期待したい。

最近作業療法士の中から、運転が困難とされた対象者や移動制約者への地域移動の支援に関わる者が少しずつ増えてきており、実践例を2つ紹介したい。

1つ目は、墨田区社会福祉協議会（以下、社協）では車いすごと乗車できるハンディキャブを4台所有しているが、地域に十分周知されていなかった。また運転者がいない時は、運転ボランティアを派遣しているが、担い手が少なく使いたいときに利用できなかった。こちらから企画を提案して、

地域で移動を支え合っていくために、地域住民向けに「移動支援と障害を知る」というテーマで講演と体験会を行った。この講習会を通して、2名の運転ボランティアが増え、今後も社協と協力していきたい。

2つ目は、一般社団法人 WheelLog、東京都墨田区にある八広はなみずき高齢者支援総合センター

（地域包括支援センター）と連携して車いすの街歩きを実施している。WheelLog は、2023 年に外務省の「ジャパン SDGs アワード」内閣総理大臣賞を受賞しており、厚生労働省は地域共生社会に向けた取り組みのモデル事業として紹介している。車いす街歩きは2022年から継続しており、参加者は車いすユーザー、医療介護従事者、福祉用具事業所、墨田区役所、学生、地域住民、区議会議員など幅広い所属や世代が参加している。車いす街歩きでは、WheelLog が開発したバリアフリー情報の収集や共有ができるバリアフリーマップアプリ

「WheelLog!」を活用する。チームに分かれて車いすを体験しながら、地域の飲食店、スーパー、トイレ、電車などの使用を通して、その使い勝手や感想、画像をアプリに登録していく。つまり、街歩きを通して、地域のバリアフリー情報が視覚化され、マップに蓄積されていく。街歩き後は、チームごとで振り返りを行い、最後に参加者全体の振り返りを通して地域課題や対策について共有を図っていく。この街歩きは、地域のネットワークを強め、道路や建物といった物理的なバリアフリーのみならず、車いすユーザーとの交流や車いすの体験を通して、心のバリアフリーが体现できるコンテンツとなっている。昨年度は WheelLog が主体となり WAM 助成（社会福祉振興助成事業）に関わり、「車いすで安心して外出できる地域支援体制のモデル構築事業」の検証に対して、東京都墨田区と町田市の協力を得て合計4回の街歩きを行った。また、様々な地域で車いす街歩きが展開できるようにコア人材の育成研修を行い、東北大学公共政策大学院が車いす街歩きの効果判定を行った。詳細は WheelLog のホームページ

(<https://wheelog.com/hp/>) に掲載されているためご覧いただきたい。効果の例として、墨田区では要支援の男性3名が参加し、電動車いすの方は近所に行きつけの居酒屋ができたり、閉じこもりがちな方は街歩きに2回参加し、新たな挑戦をしたりなど、男性高齢者の社会参加を促した成果

は大きい。また昨年度は、包括でバリアフリーマップを作成し、地域のバリアフリー化を推進している。

地域の移動支援や街づくりに興味や気概のあるリハ専門職は、所属先や都道府県士会、または地域で仲間を募り、様々な関係機関と繋がりを持つことがはじめの一歩となる。ネットワークづくりや地域のニーズ把握、課題解決に向けた仕掛けを行うために、今回の地域貢献事業への参加をチャンスとして活かして欲しい。運転支援に関わる医療機関が、地域の移動支援まで関わることができれば、多くの人が社会参加を継続できることになる。そして本学会において運転と地域移動への取り組みがさらに推進されることを望んでいる。私自身もその一員になれるように尽力していきたい。